

和朝
今昔物

竹部 五



今昔物語部 倭五目錄

○世俗傳

一 將門純友謀殺伏誅諸



今昔物語部 倭五目錄

一 將門純友謀殺伏誅諸

今昔物語 後部五

○世俗傳

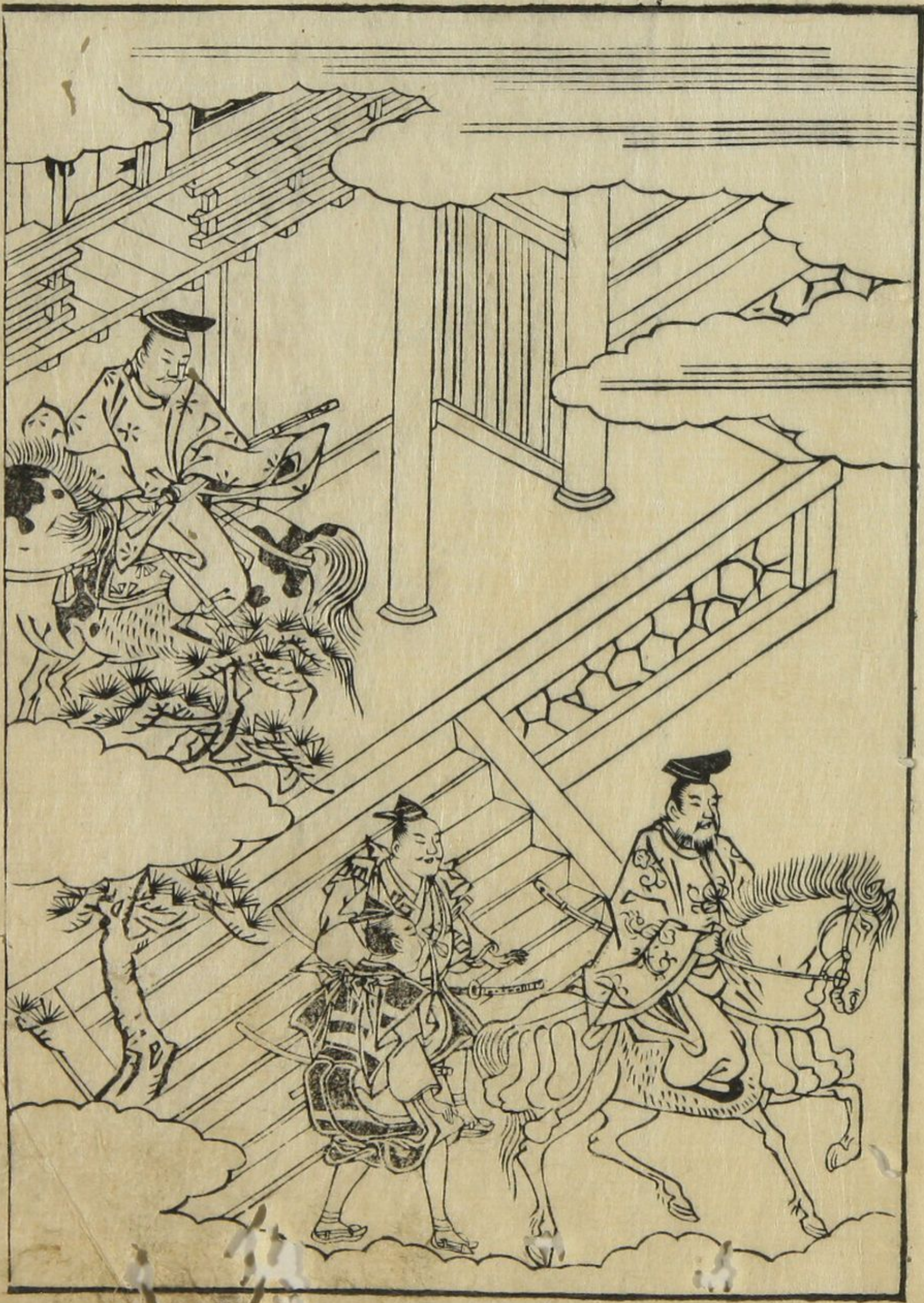
一 將門純友謀叛伏誅諸

此段本文乱脱。粗語不少。以故参考將門記等諸實録。改記如左。文義与本書大異。者者夫思之。

今いひけり。古平一代朱雀院沙汰。萬平四年に
今 陽南海の海賊やうて。國民とあやまらふ
よ して官兵とたたりてあつらふ。あつらふ首
を まきぬ。あつらふ。同六年六月。南海の張牙
者 京純友 伊豫掾從五位 下○良範男 也 といふ者。其黨のあつら
先 しく。伊子園日振つらふ。千餘艘の船と集り海

今昔物語 ○ 日月卷五

上村兼の官物とてうづいしぬ。よしよつて南海と
 ちづじへまよひて。紀淑人長谷雄男を仔細守位四
 やしてほつひさる。け淑人仔細とめりく萬氏と
 むらきうべ。海賊どもちづくちづりたり。同
 年七月下旬淑人純友と相ともあひて上洛と
 ころろ下総國ちのちの信人相馬小次郎平将門滝口
 男将と在系と。け将門が先祖の桓武天皇より
 三代高見王の一男。高望王の六人れ子あり。一
 男公平良望とつ。後よ團香くわくを結守
 府將軍ふのしやげんたり。貞盛が父あり。次男公平良將と



つし結守府將軍なり。是將門の兄なり。三男は
上總介平良兼といふ。四男と平良兼といふ。五
守府將軍なり。五男は村長平良兼といふ。六
六男は有子といふ。平良持といふ。一族なり。
あて無き者なり。貞盛と將門といふ兄弟なり。
貞盛といふてあひくら。將門の男なりて居たり。
これぞ教達乃企成といふ。いつきといふて討
つて居たり。此は河をわたり。ある日貞盛ある日
親王の仁利との縁よりゆり河。將門も後者ぬか人を
具して親王のあよりつて居り。はあてあつて貞盛

親王なりていつく。將門かきて將門へ遇。一年は具
せざるはあつて彼とていつくは居たり。あつて居たり
はいつく親王の教といふ。貞盛がいつく。あつての
他日これほど大事なれとて。宮中へさしやう
や。此とうたてつる。同年八月十九日將門純友
あ人比敵といふのちり。平安城とてんせらり。あつて
つて運のつて居るとて。あつてとて居り。あつて
將門の王孫といふ。純友といふ。純友はあつて
さした。関白といふと物とて居たり。あ人あつて
ともいふ。いつて居り。あつて二年十二月將門

しそふも味もあて。難所の森の中に伏し。は
 本陣よのこし。金控舞とあまこあふふ多たて。曉
 方よりさし。奥司これをさし。さうやう。み
 里人あつて。将門が告げらる。のれらう。うを
 由司よ。奥司これと。あて。ねむ。さう。は。え
 みのつて。さ。や。も。何のさ。か。り。あ。く。さ。う。もの
 と。あ。わ。ん。ど。備。を。さ。ん。て。これと。退。さ。く。二十餘町
 ふ。乃。く。将門が。伏。兵。の。ま。よ。退。あ。る。お。つ。敵。と。あ。ふ
 ぶ。あ。つ。す。ご。して。軍。主。公。は。さ。う。して。敵。の。陣。を
 火。攻。め。ら。る。由。司。陣。を。の。敵。と。あ。て。方。中。に

及。右。の。者。あ。つ。て。放。火。と。う。か。く。あ。中。に。あ。よ。た。乃
 森。中。に。ら。お。門。軍。と。使。報。と。う。ら。て。さ。う。く。せ
 す。さ。う。由。司。を。さ。ん。て。さ。う。く。れ。ぬ。と。あ。う
 と。さ。い。興。を。さ。ん。て。さ。う。あ。中。に。さ。う。く。す。ら。ん。と。あ。う
 林。中。に。く。く。を。さ。う。く。の。使。報。と。よ。く。横。合
 ぬ。さ。ん。と。由。司。の。勢。を。二。さ。う。く。さ。う。て。相。さ。う
 さ。う。く。く。あ。よ。お。門。が。軍。主。公。退。く。二十餘町。走
 し。間。息。を。れ。氣。つ。き。て。さ。う。あ。ち。う。あ。よ。さ。う
 つ。さ。う。て。引。退。さ。う。く。相。馬。勢。大。ぶ。く。く。さ。う
 う。く。奥。陣。と。あ。う。く。由。司。の。う。ら。陣。を。ね。さ。う

上総少将。武彦将也。奥の世王の安房守の文彦好美
の相模守のから。かく東國と云ふては。ま城
であのから。と云ふ。影の武彦相模守の
く。て。中。國。司。者。京。弘。雅。も。司。大。中
長。官。の。多。い。将。門。よ。り。中。國。と。云。ふ。て。あ。げ
る。や。う。そ。れ。よ。う。と。中。外。の。上。中。外。の。京。弘。雅。
か。中。國。と。云。ふ。て。中。外。の。将。門。よ。り。中。國。と。云。ふ。て。あ。げ
作。母。歎。と。云。ふ。状。曰。
将。門。討。從。一。國。之。衆。科。雖。難。遁。伏。檢。将。門。
柏。原。帝。五。代。之。孫。也。縱。承。領。半。國。豈。謂。非。

運哉。自古振兵威。奪天下者不少。皆史書
所載也。将門天之西與。在武藝。而云家云
入。頗。無。褒。賞。乎。若。被。下。譴。責。之。符。其。耻。辱
面。目。何。施。推。而。察。之。甚。以。幸。也。将。門。少。年
之。日。奉。名。符。於。太。政。大。臣。殿。下。數。十。年。之
間。致。勤。公。之。誠。然。相。國。攝。政。也。不。意。奉。於
此。事。歎。念。之。至。不。可。勝。言。将。門。雖。有。崩。邦
之。謀。何。可。奉。頒。舊。主。貴。閣。賜。察。之。幸。也。誠
恐。誠。惶。謹。言。

天慶二年二月十五日 将門

護上 右政大臣少將同賀息下

少書よりある。これよりして將門退討の事

多。依神社へ祈りて事

神宮雜事記曰。天慶三年二月九日被進於二所太神宮

種々神宝物等是彼東賊平將門西賊藤原友可被追討之由依祈禱也使參議從三位大中臣宗主賴基等也

年正月十一日右政大臣等と東海東山道の國司

とほりて討功ありき。是は。少政の賞を加へらる

き由然下知さる。負外從五位下。左大臣史尾法

宿祢言從右中兵衛少位下。藤原内務。藤原朝長

相織をり。と。左政大臣等奉朝。文粹二見多考へ。げられた武藏少源經基

貞純親王男。六孫王天福五年六月十五日始賜源姓。鎮守府將軍武藏下野信濃伊豫上野等守正四位上太宰大貳式部

允内藏頭兵部少輔 所謂源氏之正統也 任國に居れり。ちり。つ。も。た。上。路。

て。將門が謀逆の了らぬ。奏。関。と。これよりして位を

さげを。と。一。奉。曰。武藏少源經基。と。て。ち。り。の。ち。り。

叛逆。と。と。奏。関。と。の。延。上。り。武藏少源經基。と。の。ち。り。の。ち。り。

を。と。と。常。陸。下。徳。下。中。兵。衛。少。位。下。藤。原。内。務。の。藤。原。朝。長。の。由。

ら。い。て。其。首。と。さ。り。常。陸。の。南。海。山。陽。等。の。國。に。け。り。

て。官。物。を。お。さ。り。官。舎。を。や。れ。と。將。門。が。謀。反。

れ。と。同。て。口。の。ち。り。と。後。と。備。前。守。干。高。と。

自。弘。妻。関。と。ん。が。ち。り。と。十。二。月。下。向。妻。子。弘。石。果。と。

る。陸。路。より。上。路。と。純。友。と。け。り。を。受。て。逃。け。と。て。

我々。平高月子高多文元等。振津兔を那波
波驛より相とてけり。ふきだり。かむ。けり。は。子。是
并に文元以下討死と。平高公の。か。り。あ。り。て。耳。鼻
を。と。り。て。退。散。し。ぐ。れ。が。素。と。う。む。し。て。引。入。し。播
磨。公。好。由。惟。幹。と。せ。あ。く。生。捕。南。海。と。あ。り。し
陽。公。信。西。海。と。う。む。り。ん。と。ん。始。將。門。純。友。同。公。
在。京。し。て。比。殿。し。の。り。て。送。公。公。給。し。一。萬。平。年
中。より。初。門。の。同。東。へ。ゆ。し。し。と。純。友。の。侍。あ。り。あ。り。と
蜂。起。し。け。り。が。今。年。の。の。ゆ。公。多。く。人。と。あ。あ。一
度。よ。か。り。て。天。下。の。騷。動。と。わ。ら。り。と。り。同。三。年。二

月將門純友討ひし。て。冬。後。右。將。門。督。後。京。右。文。と
征夷大將軍なり。一書曰。治。民。部。卿。忠。文。は。退。討。の。室。と。給
所。と。ま。り。て。美。月。の。節。力。と。湯。を。ま。つ。り。お。お。照。と。あ。り。し。此。言。言。と。ま。り。を。批
原。經。基。公。公。副。將。軍。と。ん。相。と。り。と。り。人。と。り。は。太。系
元。若。系。圓。幹。大。學。和。平。清。基。教。任。源。就。圓。等。
園。東。へ。し。り。し。り。る。又。小。野。好。吉。後。二。位。大。納。言。公。材。男。若。系。隆。孝
大。元。春。實。公。公。將。軍。や。し。て。兵。船。二。百。餘。艘。を
い。と。わ。り。て。伊。予。國。へ。懸。向。と。び。し。た。由。野。好。吉。清。子
命。婦。女。お。り。り。り。り。り。り。

年を経ておひらり人おれ路の舟。さりの我今成れ

室の下野押領使儀者古なる秀郷といふもの
わらふがまゝ大織冠強足公よは八代。其次は孫村雄
が子なり。其子も人よとて。其子のうられよひなりしが。
わらふら。我お門と曰ふ。そ物家とて。目
本と曰ふ。志んんと申す。将門が館にゆきて
對面し。其辭とて。うらぬ。其言。わらふらゆ。
をらふ。此を以て。下野國みくらとて。常陸掾
平貞盛 始名い 上平をみ談話と。貞盛は又國香とわら
ふ。こをて。その辭儀と教とせ。けらる。わらふ
た。わらふて曰ふ。二月朔日貞盛秀郷にまね。

隣奥下野の勢とも。一万余人。下野
をよ。うらぬ。日とて。不若昏ぬ。よ。同。明日将門が
陳。わらふ。て。後。て。馬の鞍とや
し。物。つ。体。お門。て。同。者。は。は。
款。は。う。い。ん。せ。し。ゆ。小。款。ら。ひ。と。う。
若。ら。將。門。と。う。ら。ん。雜。兵。數。千。人。よ。國。香。孫
と。も。こ。そ。四。方。乃。林。中。わ。ら。い。の。ち。も。い。く
し。登。金。身。下。野。國。下。野。守。お。頼。曰。大。吾。人。系。上。野
今。お。平。等。ふ。千。餘。人。を。し。て。て。款。の。て。わ。ら
べ。と。順。路。り。我。中。に。人。ま。と。う。て。は。二。回。と。う。

ゆくとみんよりさるものもあつて墨壁の
ぞく築き其あつたに以てあも駈引自在
うよものあつたをよは軍士百餘人をしめて守
らしめ将門の精兵二千人人をいさめてお付
とんとやまなふと都合四千餘人相當の寇浪
をまらし居りすてふ子の下剋将門の兵二千
餘およそをて款のこゝろに居りしを家より出
らふらゆめたさるんでせり入款一万余人を
づらふるを家へつらして軍總したて寢て家
西に款ふらゆめたるをて出ぬるをてあつてさりた

て我をたしと逃しはされり貞盛も郷士の氣
と屈を拒み居りしを西に居りし林中に
あつる雜人原に火を起し貝金をあつて岡に
あつたれば百千の雷の一度に焼くさるるあつ
幾千万とつとすまんごしこれをまて款兵を
びしてゆめらまきさつたてをいふすて父をさ
逃けら款の後とあつたる將門の兵をさるる
をづめて相つらつらさるる道よあつたるる有
をさるるだおとより款に逃るけられ彼堀切
あつり。はがよみりるをさるるを墨のうら

しつめいしつめい射るふふれい敵わるといふ程
これおまじ四角八方にあげらるお大將希なりは
て引退くる物具は捨る事なるをいさうとあんど
びくた将門が軍士等自威護技等が毒気と
らえたり新氣をこれをやめて女が死なうくといふ
ようにと下知しけまじいけ由はさうさるるをいさ
くくおまじ等がくまじい被殺たり新氣を自威が
毒は衣服とあそんで一着の奇をさるる
をいさうと風のあそひは女を殺るるをいさうと
は女どもはゆるして皆くしはらうとくうとあそ

将門といさうい今宵の戦討は利とわらうといふも
敵とあそんで討まじい敵は太勢津方の小勢りて入あそる
は兵を平廣場れ合戦ははあようをいさうとあそる
去年の氣とわらうおまじい恨く軍兵くして下総
みつりて要害はくして愛に怒じ氣はあそる
相戦り利あそるいさうおまじい後引退るは
要害ふこまじいおまじい利あそるいさう
安房守奥世がいつく合戦の利は退るは
虎とかり退く河の虎は死なうとあそる
は後軍して氣はあそる敵は死なうとあそる



敗軍の強基勢。何程のさうはあつた。よせあは
 踏散してすせんともはよらして。あつて追討と。あつ
 が先味常陸公經明。あ京玄茂公。款をあかぶつ
 油断して。あつて貞盛あ郷よせあつた。あつて敗
 軍れ去年。あつて物の用あつた。あつてあつてあ
 家よあつた。あつてあつた。あつてあつた。あつてあ
 旗をあつてあつた。あつてあつた。あつてあつた。あ
 款あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あ
 くの。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あ
 兵。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あ

よあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あ
 いあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あ
 あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あ
 あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あ
 あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あ
 あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あ
 あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あ
 あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あ
 あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あ
 あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あ
 あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あ
 あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あ

巴字小退まつ。須臾よ愛化して万平みあはれ。
 秀郷とくわくくそびたふらしてゆわくれを以射
 中し。秀郷が軍士氣つらきもよくはたしてはは
 の男二千九百人落れし。将門より捕ねとよ
 ろへびくく攻戦をうらて競う心。秀郷よりよ
 りゆりて運ハ天よりあり。多岐のふれくもよ。ゆまぞ
 がせむさ。さそれくして秀郷とまに討死さよ
 と。牙をくみく下知とこれよよと秀郷が子。ちあ
 干國が守り市を向ゆゆ。あ弁。新野守。今やと
 捨てふきだ教よ。あまは貞感が一万餘人よせ

あまはくく。さあいて討てくろてたれ。あまうい。んし
 くらねんが軍兵。あまういぬまらんと。四角八方の散
 と。残りあまういふ六七百。将門をいきつとてまら
 くふのく。敵もまらざり。くれば。下総國より。つ
 廣くよ。そこもあ。一書曰下総國幸。日月十三日貞感
 秀郷退りけて。下総國より。つとてまら。将門。要吉
 う。ゆりて。いもあ。貞感相くつて。い利あまうい。んし
 せし。風とよりあはらめて。将門。あまうい。んし。んし
 ちぬるまら。日月十四日。將門より。つとて。あまうい。んし
 けられた京都より。新敵。退り。討のまら。あまうい。んし。んし

若原右文副將軍刑部右京右衛門尉源經基
以下の官軍數万人後河原まで急のより披原有
かれい。今もて將門一つとてさうざういふる國勢と
同怖してあつた。是の故に降参一のる兵千人
ふ多うさうとくれども。將門勇氣とあすげ甲冑は
急し後馬は難とさうして先登と。堅固陣と強と
取らこし神のまゝく。百發百中とさうふらあつた
羽伝のこ。其の義母あつてあつる兵とさうぞ
後軍等とさうは。難と。貞盛秀郷があつた
易してさうらんゆと。利後時より引ささるわさふ。

すて小敗小及びんと。將門氣を奪てさう一騎敵
の中へ刺て入。秀郷が勢大將と知れい。お田中次
房資方以下百人とさうてさうと。かゝる將門
勃然とて面張とさうい。後と討た。たは退去るを
千變万化と。さうれども一人あつた。すては討て
ゆる知よ。お平お武等百人とさうて。款
を退退さう。貞盛も百人とさう。撲合よ入て
責るやう。秀郷とさう百人とさう。しらとさう
つてさうさう。貞盛
ておらさう。將門がさう。羊の眼と。曹れ綴とさう。

今昔物語の和訓卷五

〇十七

一本作秀郷
未知何是

秀郷
つてはげい

され向く射しけし。将門吾奴の将将たるは。此
け第一節ふりつて。るよりけり。誠よ。あまら。誠
秀郷とせよつて。将門が首級あまらる。一本曰貞感
りて将門を殺し。た度で。利と共の。秀郷いつつて。將門を
将門の妻は通し。その女が。射しよつて。将門が。寢る。思ひ。射
つて。将門が。射死して。後兵百九十七人。家の。こよ
つて。馳来り。槍と。並つて。射死す。将門。今。身。侍。厨下。移
守。射。并。秀。清。女。若。原。玄。孫。相。換。國。よ。を。つて。射。
安房守。與。世。王。上。信。由。て。殊。を。け。坂。上。藤。原
玄。明。の。孝。清。國。よ。を。つて。射。死。す。その。介。の。反。射。さ。る。く。え
あ。ん。を。つて。殊。を。け。射。死。す。坂。東。と。を。め。ね。と。す。り

く。三月九日。秀郷は。後四位下と。授。け。さ。下。中。武
藏。右。衛。門。の。守。の。任。を。け。貞。感。の。後。五位下。の。叙。す。
右。の。勅。は。任。也。神宮雜事記 有人。住。守。府。の。軍。也。か
ま。り。の。内。ち。め。自。將。門。が。頸。系。と。を。け。を。獄。門。よ。う。け
ら。り。四月。参。議。右。衛。門。督。若。原。忠。文。今。身。刑。部。卿。
忠。舒。散。位。源。經。基。右。衛。亮。若。原。國。幹。大。監。物。平
清。基。散。位。源。就。國。等。後。河。上。り。下。向。と。去。や。め。め
若。原。純。友。の。侍。祿。後。河。波。清。隆。を。め。と。め。ら。る。が。
河。波。女。若。原。國。氏。と。合。戦。と。國。氏。敗。軍。と。て。警。言
固。使。坂。上。散。基。と。共。り。河。波。國。氏。出。く。清。隆。め。め

平家物語の神宮雜事記

ゆく。純友國府へ行く。救火。公私の財物とらふ。
 心。國風はむ。言。二箇月を経て人救と
 償。後。母。官軍。到。時。
 より。追捕。使。た。近。傍。お。ね。お。ね。お。ね。
 源。經。基。と。決。官。と。右。衛。門。尉。者。京。慶。寺。と。別。官
 也。右。衛。門。志。大。茲。春。實。伝。主。曲。と。掃。摩。後。
 二。ヶ。月。お。ね。向。や。り。各。二。百。餘。艘。の。船。と。
 伊。豫。國。お。ね。官。使。い。ま。い。ま。い。ま。い。ま。い。
 純。友。が。ね。お。ね。い。ま。い。ま。い。ま。い。
 お。ね。と。お。ね。と。お。ね。と。お。ね。と。お。ね。と。



賊徒の宿所隠家海陸交通塞の塞内を
ゆへ國風うれと指南やして賊と付くちを利と
つり。天喜四年五月の賊等ひそくふを寧府
みつりて累代の財物とつづい出たをりて府
中さげしむのら官使お古陸地よりゆとじし
を幸者實等海よりおこりて。後前國物多
み向いてより合戦と。者實勇とよりよて。短
そりて拉ぐ。恒利遠方等相志くがよて。殺百乃
賊とつらとわり。賊軍退とて。船くしよて。舟
くら官軍賊船く入。出たつをて船と焼。賊徒

はのよやぶれてわらひいさし或いさつら賊船
こ八百餘艘をりさる。者を殺とち。はれおる者
どもわらひいせむげとせわらひい降参と純友の舟
しよて。伊予國おむげらる。高國の船を固く。指
くる橋を保と。しよ者純友をいよ。まを丸と付
ころして領と。あへれらる。一奉曰を保純友は生
織元一なり。一書曰まを丸は生年十三なりけるが。又とまを丸は海
出でしげとらる。まを丸は九年うて。密教の長藤をりし。がまを丸は強
かしてわらひい。この者お付より。一書曰純友の子伊五丸とあり。一書曰
は地ね方とて。お戦い純友と射中しける。とあへれね田新者。はれ。お
首と。同七月七日純友の子が首を。おのり。は
お近る場ありと。のうと。奉と。あへれを。お

上巻の目録の口の中
三十一

つれづれに母が。昔自在門府に掃部在在

掃部 振魂命

四世孫天忍人命之後也

と。又畫師と内裏より送て。純友を丸

首を右近の場めわつ。其のあまゆるとて。つれづれに首紙

寫しておとすと。彼首紙清後などせしめがせだ

肉裏へいり入るがためわらぶと作もさしをこ。在上

右近の場よりて。其首紙寫してちりたる。顔のうら

らぶとつかりととらる。ば在在の物のうらと寫

して。其首紙わらぶと畫師かり。つれづれに。檢非

遠使な在門府に善邦を免して。たんの體く

常より十一月は太叔とねとまりる。赤山をよみしる。此

ちづむるのふつとちり。日五年三月に伊勢守依人奉

幣使をたてらる神宮雜事記曰。天慶四年三月廿八日以

負辨郡。被奉寄太神宮。又依官者尾張三

河遠江各郡神封戸各拾烟。被奉寄太神宮。二所宮祓宜

各賜一階是。則依將門追討之御祈禱也。又七道諸國神社被

奉増位階。一書曰。將門純友死。送のたけ。依八幡宮。みりのも。たけ

つる。み。之。神。の。冥。助。より。て。ち。や。と。く。や。ら。び。わ。も。い。其。報。賽。の。た。け。に。臨。府

乃。あ。ま。と。ま。り。か。○江次等曰。臨時祭。平將門乱。送報賽也。○一

書曰。信所のあまのみとれくるい。た。ま。ま。年。四。月。廿。七。日。あり。る。の。た。け。乃。後

ハ。梅。下。守。言。之。報。賽。あり。る。御。人。言。人。あ。く。十。人。たり。始。々。賀。美。へ

紀。實。を。傳。ふ。所。に。お。り。し。り。若。む。と。志。信。の。事。を。は。な。ま。り。始。々。賀。美。へ

紀。實。を。傳。ふ。所。に。お。り。し。り。若。む。と。志。信。の。事。を。は。な。ま。り。始。々。賀。美。へ

紀。實。を。傳。ふ。所。に。お。り。し。り。若。む。と。志。信。の。事。を。は。な。ま。り。始。々。賀。美。へ

今昔物語五

